

戦国ロケット“流星”

坂田郡では古くから祭礼や祝いごとがあると「流星」を打ち上げました。流星とは打ち上げ花火の一種で、関ヶ原合戦で石田三成軍が狼煙として用いたことに始まり、合戦後に三成方の落ち武者が郡内に土着し、その製法を村人に伝えたものが始まりといわれています。

6mほどの矢竹はススキを用い、本の方、すなわち太い方が矢の先で、その先端に火薬をつめたコップをくくり、末の細い方には矢羽型の風きりが4枚つけられています。

コップは以前は竹筒でしたが、現在では鉄製の筒を用いています。コップに詰め込まれる火薬は、硝石・硫黄・麻灰を調合したもので、その調合は流派によって独特の配合となっています。

古くは流星はただ打ち上げるだけのものでしたが、明治の初め頃より矢つりと日傘がつけられるようになりました。矢つりは和紙製の落下傘のこと、これによって矢竹は打ち上げ後水平につられて静かに落下することと

なりました。と同時にコップの周囲にくくり付けられた日傘がパッと開くようになっています。取り付けられる日傘の数によって流星そのものの大きさも変わり、三本、五本、十本、二十本付きなどと称しています。以前は五十本付きという超大形も打ち上げられていました。

打ち上げはカケバイに引っかけ、導火線に頼らず人間が直接おこないます。発射の位置がずれないよう矢羽の先端は人間がもっています。その打ち上げの瞬間は迫力満点。打ち上げ花火というよりは、むしろロケットを思わせます。滋賀県選択無形民俗文化財。(中井 均)



大空に上昇する流星

情報 BOX

◆伊吹町文化財専門委員会では、小中学生を対象に、町内の指定文化財や自然・文化遺産45件を分かりやすく解説した学習資料を作りました。

『訪ねてみようふるさと伊吹の文化財』

◎問い合わせ先

伊吹町教育委員会生涯学習課

☎0749 (58) 1121

◆近江町教育委員会では下記の報告書を刊行しました。

『近江町埋蔵文化財調査集報2』

狐塚5号墳より出土した豊富な形象埴輪を紹介しています。(近江町文化財調査報告書第19集)

◎問い合わせ先

近江町教育委員会 社会教育課

☎0749 (52) 3111

◆米原町では米原町史資料集第1冊を刊行しました。

『明治の村絵図』 頒価2,500円

米原の村絵図をオールカラーで収録。さらに各字ごとに詳細な考察を掲載しています。

◎問い合わせ先

米原町役場 企画調整課

☎0749 (52) 1551

◆◆編集後記◆◆

『佐加太』第5号をお届けします。またおそくなりまして申し訳ありません。先日の編集会議の結果、ついに怠慢編集子にはまかせておけないということとなり、今後は編集事務局も毎年持ち回りでおこなうことになりました。これで発刊もおくれることはなくなるでしょう。またそれぞれの担当者の色が出てくることと思います。乞う御期待。

さて、先日怠慢編集子は埼玉県吉田町の龍勢を見学に行ってまいりました。沿道は見学に行く車で渋滞するほどの賑わいでいた。椋神社境内には龍勢保存会のぼりがはためき、秩父神楽が奉納され、桟敷は見学者で満席でした。民俗文化財が珍しい文化財としてではなく、地域住民の年間行事として欠くことのできないものとして住民の圧倒的支持を得ている姿に感動しました。文化財を守り、伝える意義を改めて考えていきたいと思います。(渡連恵)

坂田郡文化財ニュース

佐 加 太 第5号

発 行 平成8年11月1日

編 集 坂田郡社会教育研究会文化財部会

〒521滋賀県坂田郡米原町下多良3-3

米原町教育委員会社会教育課

0749 (52) 1551

印 刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

第 5 号

1996年11月1日

滋賀県坂田郡社会教育研究会
文 化 財 部 会

戦国時代の山城

鎌刃城跡は米原町番場の標高384mの山頂に立地する中世山城です。

その築城年代は一説に鎌倉時代、箕浦荘地頭土肥氏の詰城として築かれたと伝えられていますが、その立地は在地支配の城としてはあまりにも村落と離れた山中にあり、むしろ境目の城として街道封鎖を目的とした築城であったと考えられます。

坂田郡は犬上郡と接していますが、この郡境は戦国時代になると単なる郡境ではなく、江南の佐々木六角氏、江北の佐々木京極氏(後には浅井氏)の国境となります。この江南・江北の国境には太尾山城、磯山城、菖蒲城などの山城が築かれ、鎌刃城もこうした山城と連動する国境警備の城として機能していたようです。事実天文年間(1532~1555)には六角定頼と京極高延、浅井亮政で争奪戦がくり広げられていることが、『島記録』や『親俊日記』に散見できます。

城跡の位置する山は北・東・西は急斜面となり、天然の要害となっています。南方のみは尾根続きとなります。そこには9条にのぼる堀切が設けられています。



内枡形虎口の石段

—米原町鎌刃城跡—

山頂部に若干の高台を有する主郭と、堀切によって区画された2つの副郭が鎌刃城の中心部で、主郭は石垣によって構築され、虎口は内枡形となっています。

中心部より北西および南西に派生する2つの尾根上は段々に削平され、曲輪群を形成しており、先端部には堀切が設けられています。北西曲輪群には土塁で囲まれた曲輪があり、その南斜面には見事な石垣が残されています。また虎口は石垣と石段による内枡形となっています。南西曲輪群の先端には敵状堅堀群が配されており、斜面の防御を強固なものとしています。

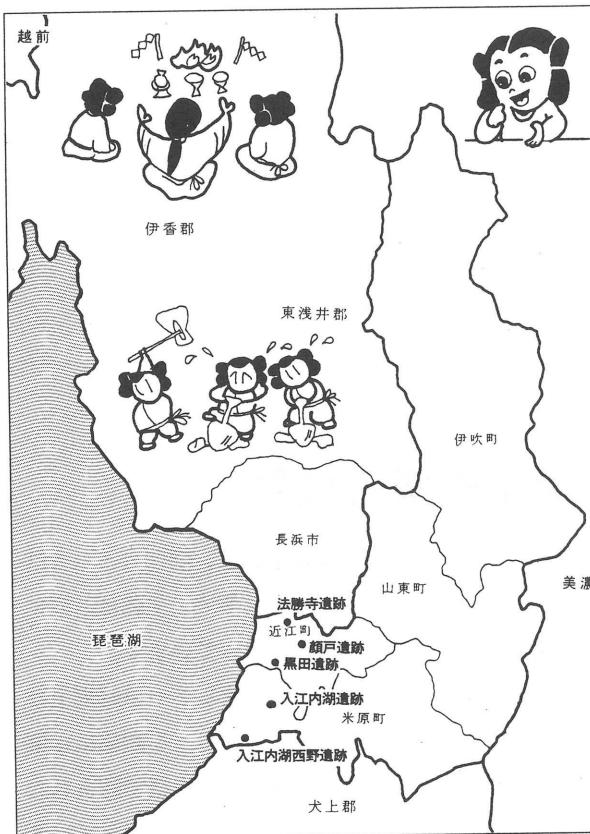
また、城跡南東山腹には岩盤を割り抜いた石樋が残されており、水の手と考えられます。

このように鎌刃城の規模は湖北地方では小谷城に次ぐものであり、その構造は戦国時代末期の近江の築城技術の到達点を示しています。



北西曲輪群の石垣

米原町教育委員会では来年度に鎌刃城跡を町指定史跡に指定し、保存・整備を目的とした測量調査、発掘調査を継続して実施していく予定をしております。調査の成果は順次『佐加太』にて報告します。御期待下さい。



坂田郡の遺跡案内 古墳時代の集落編

『佐加太』3号・4号では郡内の主要な古墳についての概要をお届けしました。今回は当時の人々が生活していた場所（集落跡と呼ぶ。）の一部についてご案内したいと思います。

郡内でも4町それぞれに様相が異なります。山間部が多くを占める伊吹町でははっきりと古墳時代の集落跡と認識できる遺跡は未確認です。隣接する山東町の状況も同様です。両町とも今後の発見が期待されます。近江町の法勝寺・顔戸・黒田といった古墳時代前期の集落跡では、集落間が大規模な環濠によって結ばれていたことが判明しつつあります。米原町の入江内湖にしの西野遺跡では掘立柱式建物のみで構成される前期の集落跡が確認されています。これらの遺跡からは、東海や北陸から持ち運ばれてきた土器が一定量見られます。また入江内湖遺跡からは農耕具をはじめ大量の木製品が発見されています。中期以降は調査例が乏しく詳細は不明です。

時代を問わず東西文化の接点である坂田郡は今、近隣市町村はもちろん他府県からも大変注目を集めています。坂田郡内の遺跡が“ムラ”なく把握される日はいつか。これからが楽しみです。

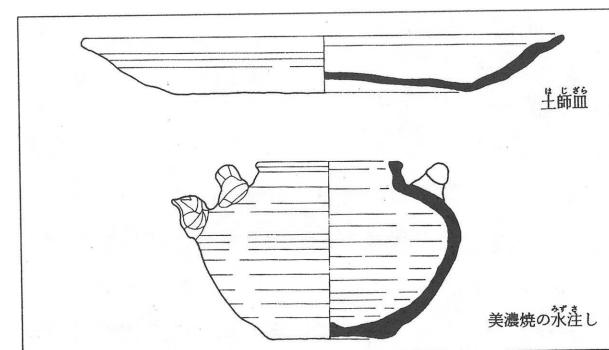
上平寺城下町跡試掘調査概要 伊吹町

滋賀県のもっとも東の端にあたる伊吹町上平寺地区
は、伊吹山の南麓の藤古川が作りだした扇状地の扇頂部
に位置しています。

北近江の守護大名京極氏が、この上平寺周辺に本拠地を構えたのは1500年代の前半です。伊吹町所蔵の『上平寺城古図』（江戸時代初期）には、伊吹山中腹の山城、京極氏や重臣の館跡などとともに、武家屋敷地や民家など城下町と考えられる地域が描かれています。

昨年度から、この城下町地区の遺構の存在を確認するための試掘調査をおこなっています。今回の調査区は古絵図の「町屋敷」にあたります。

調査の結果、柱穴と思われる多数のピットや深さ20cm・幅150cmほどの溝を確認しました。溝の黒色の湿っぽい埋土からは土師皿や信楽や常滑の陶器片、炭化した穀物が出土しました。この溝は山側から外堀に向かって生活排水を流したものと考えられます。



上平寺城下町跡出土遺物 (S = 1 / 3)

銀象嵌の鐸 一すも塚古墳一 山東町

すも塚古墳は、西接する長浜市域や近江町域とを画する横山丘陵より派生する舌状丘陵の麓に所在しています。すも塚古墳の出土品は、明治45年に近くの西元寺本堂改築工事の際の土取作業中に発見されました。その出土品の内容を概観してみると、須恵器（壺身、蓋、高壺、短頸壺など）、馬具、武具（直刀、鐔^{つば}）、装身具（金環、銀環）などが出土しており、6世紀後半から7世紀の初め頃と考えられています。その後、地元鳥脇区が管理される中、昭和42年現存する全ての出土品を町の文化財に指定しました。

しかしながら、出土して以来80余年の歳月が経過しており、特に金属製品の鏽化が進行していたので、保存処理と土器等の復元を併せて行いました。

その結果、鐘に銀象嵌が施されていることがわかりました。この鐘は約半分が欠けていますが、復元すると長径9cm・短径7.5cmの倒卵形をしています。また、台形状の透かし窓も9窓復元できます。そして、銀象嵌は、外縁（側面）に2条の直線文と5個の「の」字状文（勾

玉文) が施されていました。

象嵌は、鉄の下地の溝に金・銀の針金を打ち込んで模様をつける金工技術で、関東・畿内・九州に多く分布しています。

この象嵌が施された大刀を保有することは、権威の象徴という意味合いもあることから、在地有力者の存在を裏付けられた意義は大きいといえます。(桂田峰男)



真写線X嵌象銀鍾

手焙り型土器 近江町

「近江系土器」の代名詞となっている「受口状口縁をもつ土器」には、「甕」「鉢」「壺」の3様のものが存在します。なかでも、鉢の上部に7割ほどの^{封緘}覆いをもつものがあり、これを「手焼り瓶土器」と呼びます。

近江町には、弥生時代後期の墓域が4箇所で確認され
ており、北部より「法勝寺遺跡」「長門寺遺跡」「埋塚
遺跡」「西田寺遺跡」と呼ばれています。

このうち「長門寺遺跡」は、比較的短期間に築造された墓域と推定されていますが、これまでの調査で3基の方形周溝墓が発掘されており、そのうちの1基の周溝内部より、弥生時代後期の壺や甕などの土器と共に、手焙り型土器が出土しました。

この手焙り型土器は、高さ19.2cm・胴径18.8cmを測り、
平底の底部を持ち、胴部の下半に突帯をめぐらせていま
す。口縁部・胴部・突帯部には、それぞれ右上がりの刻
み目が付けられている他、覆い部の両端に耳状の突起を
もつことが特徴となっています。

土器の用途は、解明されていませんが、江戸時代から明治時代にかけて使われた「手焙り」に似ていることから、この名称が付けられています。(宮崎幹也)



手焙り型土器（長門寺遺跡）